

## Report of the Mission in West Africa on some Ethnographic Objects of Senegal

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 了 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004556">https://doi.org/10.15021/00004556</a>

## 西アフリカ収集調査行から

小 川 了\*

### 1. はじめに

着任以来、ちょうど1年目にあたる1978年11月1日から同年12月10日まで、昭和53年度、国立民族学博物館西アフリカ資料収集調査業務に携わった。今回の私の収集業務は従来のそれと若干異なっていたので、まずそのことを記しておきたい。今回の西アフリカ資料収集調査行は、当初からそのみで独立に計画されたのではなく、1978年9月1日に出発した本館の和田正平助教授を隊長とする「熱帯アフリカにおける物質文化の比較民族誌的調査」隊に現地で合流して、同調査隊がすでにおこなっている学術調査の一部を、私がおこなう予定の収集業務に織りこむという形で計画されたものであった。すなわち同調査隊のうち、和田正平助教授、および江口一久助教授はトーゴにて、端信行助教授はカメルーンにて、それぞれ物質文化を中心にした調査をおこなう。他方、私はすでに調査経験のあるセネガルでの収集業務を終えた後、トーゴにて和田、江口両助教授と合流し、

両助教授の調査結果にもとづき収集をおこなうという内容である。端助教授が調査をおこなうカメルーンに関しては、同国での資料収集はかつて江口助教授により集中的になされていること、および私の収集日程が計40日と短いものであることなどから、今回の収集調査計画には当初からふくまれなかった。

今回の収集旅行では仮面、木彫などの収集もさることながら、一般生活用具を中心に集めることが第一の目的であった。つまり、それぞれの部族の中心的な生業形態に密着した道具をとおして、部族生活を理解しようとするものである。仮面、木彫などは芸術的な観点から高い評価が与えられているのみならず、それらは各部族の特徴的な儀礼組織に結びついている点で大変重要なものである。ただ、これらの「芸術品」は世界の愛好家が競って求める対象となり、その多くはいわゆる骨董屋の手に渡っていることが多い。骨董屋が所蔵しているものは一般に値は割高であるが、保存状態はよく、モノ自体に関してはすぐれたものが多いことなどから、モノについての情報がしっかりしている限り、骨董屋、民芸品店から購入する方法にも、それなりの長所利点が認められる。今後ますますの値上りが予想されることを思えば、早いうちに買っておく方がよいとも言える。

しかし、そういった収集方法だけがすべてでないことは論をまたないだろう。日常生活に使われる道具が欠落するおそれがあるからである。日々の生活をおこなっていく上で、人々はどのような道具を使っているのか。そこで、私は、人々

\* 国立民族学博物館第3研究部

にとって日常的に必要な、「ごくあたりまえ」の道具を収集することに主眼をおくことにしたのである。したがって、本館の梅棹館長がいわれている「ガラクタ」に類する資料も遠慮なく購入することとした。この点に関して微妙な問題がないわけではない。つまり、村落部にはいり、村人が日常的に使っている道具を買い取りたいといった場合、村人はまさにその道具を今つかっているのだから、手放したがるらないということである。モノに相当する金額を払うといっても、モノそのものに愛情がしみこんでいるのだから無理からぬ話である。特に今回の私の収集行のように短期間のうちにいくつかの地域をまわろうとすると、この問題は矛盾としてはっきりあらわれる。代替物を作ってもらっただけの時間はないからである。このような場合、大袈裟に言えば、収集者の人間性ということが表面にでるだろう。つまり、収集者が支払う金の多寡が問題なのではなくて、人々と私く収集者>との間に人間的な信頼関係ができるかどうかが鍵となるのである。

実際には初めて足を踏み入れる土地で収集することも多く、信頼関係を結ぶことははじめから無理な場合もある。それでも購入しようとするそのモノについて、私に学ぼうとする熱意と謙虚な姿勢があるかどうかが決め手になるのだということを経験して学ぶことができたと思う。

## 2. 収集日程、計画と実際

上に記したような基本計画にもとづき、和田正平助教、端信行助教の意見を考慮に入れて立てられた収集日程の計画は下記の通りである。

1978年  
11月1日 Osaka →  
Paris (FRANCE)  
11月7日 Paris →  
Dakar (SÉNÉGAL)  
11月27日 Dakar →  
Abidjan (CÔTE D'IVOIRE)  
11月30日 Abidjan → Lomé (TOGO)  
12月10日 収集調査完了

西アフリカの資料収集に行くにあたって、パリ（フランス）で1週間弱とどまった理由は次の通りである。ひとつはビザの問題。アフリカ各国はたとえ短期間の滞在であってもビザを取得しておかなければならない。セネガル、およびコート・ディボワールに関しては日本に大使館があるのでビザ取得は日本でできる。しかし、トーゴについてはパリでビザを得る他ない。ビザ取得のためには普通、3～4日から1週間ぐらいの時間を見込んでおかなければならない。もうひとつの理由は、西アフリカで購入した資料は一度パリまで送られ、パリの日本通運支店でまとめられ、再び日本に向けて送られることになるので、その間の手続きをパリ日本通運支店に依頼しておかなければならない。ところが、たまたま11月1日、2日はキリスト教の諸聖人の祭日となり、さらに土曜、日曜はもちろん休業となるので少し余裕をみておく必要があった。もちろん、パリに滞在するこの期間中に資料、特に文献資料を購入する。

セネガルは予定では3週間弱の滞在中である。到着後、現地の日本大使館にて私の業務内容を説明し、許される範囲内の援助をお願いした上で、すぐにも北西部のジョロフ地方に行く。ジョロフ地方ではすでに私がよく知っているフルベの

人々の村々で、彼らが営む半農半牧の生活に係わる用具を収集する。5日以内でジョロフ地方での収集を終了し、一度首都にもどり収集品の整理をすませた上で、今度は南部のカザマンス地方に行き、ここでは稲作と漁業を営むディラオ族、また、農耕を営むマンダング系の人々の村で収集をした後、セネガルの中にある別の国、ガンビアを経てダカールにもどり整理、発送、というのが私の予定であった。

トーゴに関しては先述のように、和田、江口両助教授の協力が得られるので、10日で全業務を終えられるはずだ。

さて、以上は出発前の計画である。実際にはすべてこの通りに事が運ばれたわけではない。

まず、セネガルに到着するや、いきなりイスラム教最大のお祭り、タバスキに遭遇し、まる4日間経済活動がほとんどストップしたため動きがとれなくなってしまった。さらに、収集品の整理、梱包作業に予想をはるかに越える日数がかかり、セネガルでの滞在予定日数20日を大幅にオーバーすることになった。そのためコート・ディボワールでの収集は断念するほかなくなった。その上、トーゴへの到着が遅れ、和田、江口両助教授には多大の迷惑をかけることになる。コート・ディボワールの日程は当初の計画でも3日間の滞在日数しかなく、その間に収集、整理、発送までできると考えた当初の予定が甘すぎたといわなければならない。いずれ、3日間では良い収集ができるわけもなからうから、コート・ディボワールでの収集を断念したこと自体はそれほど重大なことではない。それよりもトーゴへの到着が遅れた結果、その間、

私の到着を待ってロメに待機して下さった和田、江口両助教授に心配をおかけしたのみならず、両助教授の行動を数日間にわたって制約したことになり、その点まことに相いすまなく思っている。その上、セネガルでの収集業務の終盤1週間は資料の整理、梱包の作業で毎夜2時頃までかかったため、疲れと悪性の下痢で、トーゴについてからは両助教授に私の健康についてまで心配をかけることになってしまった。誌上を借りて深くお詫びと感謝を申し上げたい。

セネガルでの収集業務が遅れた理由は、先にも述べたように予期しなかったタバスキの祭りで4日間動きがとれなくなり、さらには収集後の整理、梱包の段階で乾季としては48年ぶりという長雨に3日間降りこめられたため戸外での作業ができなくなるなどの悪条件が重なったこともあるが、整理、梱包を短期日でできると予想した私が村落部での収集に少し時間をかけすぎたこともある。アフリカでの収集業務は梱包もみずからおこなわなければならないことを考えると、整理、梱包には十分な時間をみておくことが必要である。

なにしろ初めての経験で、緊張の連続からついには体調をくずす結果ともなったが、和田、江口両助教授の協力を得て、公務出張期間をオーバーすること3日で全業務を完了しえたのはまだしも幸いであった。

### 3. 収集品から

#### (1) 農具

セネガルの首都、ダカールから北東へ300キロ上ったあたりから東にむけてひろがる地域はフェルロと呼ばれる半砂漠

地域である。ジョロフ地方（行政的にはリングール県）はその一角を占め、セネガルの主要農産物である南京豆の栽培北限となっている。同地方はまた、トウジンビエ、および南京豆の栽培を生業とするウォロフ族と、季節的移牧をおこなうフルベ族の混在地帯である。気候および土質の条件は決して農耕に適しているとは言いがたい。アカシア科の植物がまばらに散見できる大地は一面砂におおわれており、年間の平均降雨量も過去30年で450 mm 前後でしかない。しかも、この降雨は毎年の雨季（7月から10月半ば頃まで）の間100日前後に集中している。つまり、この地方での農耕は雨季の間にみに集中しておこなわれるものであり、作物も短期促成が可能なものに限られる。雨季にはまた、禾本科の植物、および一般にクラム・クラムとよばれ、するどいトゲのついた実をむすぶ植物 (*Cenchrus biflorus*) が地をおおうので牧畜も可能となる。10月半ば頃から翌年6月末頃まで続く乾季の間、一切の農耕は不可能となり、牧草もなくなるので、その間、フルベは家畜をつれて南下を余儀なくされる。

このような気候条件のなかで栽培される農作物は、人々の食生活の基盤をなすトウジンビエ (*Pennisetum gambicum*, および *P. polystachyum*), および換金作物としての南京豆 (*Arachis hypogaea*) が主である。*Sorghum* (モロコシ属) は一般により多くの水分を必要とすること、および成熟までの期間が長いことなどからほとんど栽培されていない。上記2作物のほかにはニエツベとよばれる豆 (*Vigna sinensis*), およびローゼレ (*Hibiscus sabdariffa*) などが重要であろう。

この半乾燥地域での農耕をささえる代

表的な農具は、セネガルのウォロフ語でイレール（正確には *illeer*）と呼ばれ、フルベ族の人々はゴップ (*goppu*) と呼ぶ長柄の手押し鋤である。鋤部は幅約20センチ、前後の長さ約15センチ、鋭角状の半月形をした鉄の刃でできており、刃の根元、中央部に柄をはめこむ台筒がとりつけられている。イレールの何よりの特徴はその柄の長さであり、普通2メートルをこえる。人は胸元から前方に腕を押しだすようにして使うのであるが、台筒は鋤部に対して角度をもってとりつけられているので、人は立ったままで使用できる。イレールは基本的には除草具である。地表面の下4~5センチのところをす(鋤)くので雑草の根を切る。トウジンビエにせよ、南京豆にせよ、播種後、雨が順調に降りさえすれば成長するので、それと同時にたえ間なくはえる雑草の除去が人々の主な仕事である。トウジンビエ、あるいは南京豆の根を切らぬように、それらの間にはえた雑草を能率よく除去してゆく道具として、鋤部の大きさも適当であり、また、立ったまま作業ができるイレールはすぐれたものである。もちろん、除草のためだけではなく、空気をいれるために土を鋤きかえず時にも用いられるし、イレールを垂直に立てて播種用の小穴をつくるのにも用いられる。

この種の手押し鋤は西アフリカ、サヘル地域に広く分布しており、川田順造氏はオート・ボルタ、ドリのフルベ族で、またアリビンダのクルンバ族で同様のものを採集しておられる。さらに、Arkell, および Monod の報告にもとづいて Pélissier はこの種の手押し鋤の分布を西は大西洋側セネガルからハウッサ圏を通りチャッド、さらにスーダンのダルファー



写真1 イレールを使っての除草作業

ル、コルドファンにまで及ぶことを述べている [PÉLISSIER 1966: 89]。また Péliissier は、15世紀の Ca da Mosto の報告に手押し鋤の報告があることなどからして、この農具がヨーロッパ人の発明によるものではなく、現地人の発明によることを述べている [PÉLISSIER 1966:

89-90]。この手押し鋤はしかし、川田氏も述べられるとおり、動物や人にひかせる犁を生み出すものとはならなかったことを記しておこう [KAWADA 1975: 15]。動物にひかせる犁はサハラ以南のアフリカにはほとんどない。

この長柄の手押し鋤はジョロフ地方ではウォロフ族、フルベ族ともが使うものである。長柄の手押し鋤、イレールに対し、ジョロフ地方でもウォロフ族には散見できる短柄の手押し鋤、ソク・ソク (*sok-sok*) についてふれておこう。これはイレールと対比するためにここで記すものであるが、主な使用域はジョロフではなく、300キロメートルあまり南下したサルーム河とガンビア河にはさまれた地域である。ここらあたりに来ると年間降雨量はジョロフ地方の約2倍にあたる900ミリほどあり、土質も砂の多いジョロフ地方に比べればずっと粘土質に近くなっている。植物の根茎も多くなることから、丁寧な作業が要求され、立ったまま使うイレールでは無理である。このよ

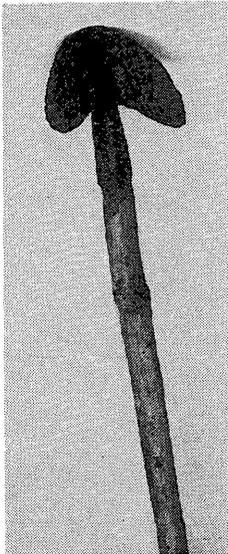


写真2 イレールの刃の部分



写真3 ソク・ソク (全長約50センチ)

うな理由から、この地方のウォロフ、およびマンダング系のソセ族などが使う除草具はソク・ソクである。ソク・ソクの鋤部の形はイレールのそれと似てはいるが同形ではない。ソク・ソクの柄部は約40センチの長さであり、しががんで片手で押して作業する。もう一方の手はすでに鋤いた部分に掘りおこされた雑草の根などを取りはらうのに使える。柄の部分はなかなか精巧なつくりであり、親指と人差し指の股の部分をも効に働かせることができる。柄が短いためイレールより正確な作業が可能である。ただ、しががんで前進しながら使う道具なので、立ったまま作業できるイレールにくらべればより多くの疲労をとまなうといえよう。

さて、再びジョロフ地方にもどると、イレールのほかに、*konko* とよばれる短柄の手鋤がある。これは長さ8センチ、最大幅5センチほどの鉄の刃の根元を細くし、木の柄にあけた穴に差し込んだものである。刃を差し込む部分は手元にくらべふとくなっている。除草用、および下生えを除く際にも有効な道具であるが、特徴としては南京豆の播種に使われることであろう。人は腰をふたつに折り、南京豆を左手に握りこみ、右手に *konko* を

もち、*konko* のひとつりで小穴をつくると、そこに左手の南京豆を植え、順次、後ずさりしながら作業する。身体をふたつに折り曲げておこなうので、前に進むより後ずさりしながらの方がはるかに楽であり、作業する人はかなりの速度でおこなっている。

ジョロフ地方ではこのほかに、ふたまたになった自然の材木を利用した *naafirdu* とよばれる道具を一つ購入した。これは長さ180センチ程で、具合よくふたまたになった部分が使われており、南京豆を収穫する際、根の部分を掘りかえすために使われる。うかつにして、何の木を使ったものかを問い忘れていたが、いずれ調べる機会はあるだろう。やはり、立ったまま前方へ押しながら作業でき、しかも先端に鉄の刃がついているのではなく自然の枝木を切ったままであるため、南京豆を傷つけることなく掘りおこせる。自然物を利用したものとしてたいへん合理的である。

その他、一般にフランス語では *coupe-coupe*、スペイン語では *machette* と呼ばれ、その両方ともがアフリカで広く通用している山刀がある。これは大方が刃渡り45センチほどで万能具のひとつである。農耕民、牧畜民ともこの山刀を肩か

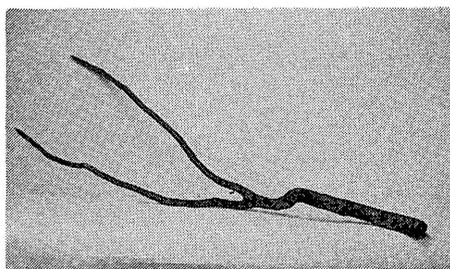


写真4 ナーフィールドウ  
(全長約180センチ)

ら紐で吊り下げている人を見るのは珍しくなく、小枝を切り落したり、灌木を伐りはらったり、多用途に使われている。

もうひとつ、フルベが *ngoobaan* と呼ぶ穂刈り庖丁、および農具とはいえないが牧畜民フルベが使う井戸掘り用の木製スコップをあげておこう。

*ngoobaan* は厚さ1ミリ程、刃部の長さ14センチ、高さ3.5センチほどの手のひらにはいる大きさの庖丁である。背側中央部にある柄を中指と薬指の間にはさみ使用する。背の部分にはチューブを切った背あてがついている。トウジンビエはまず根元から切り、ついで穂刈り庖丁で穂の部分を取りとる。

木のスコップはプラール（セネガルでのフルベの言語）で *lan* と呼ばれるもので、普通、*bani* (*Pterocarpus erinaceus*) の木が使われる。長さ150センチほど、舟の櫂の形に似ている。これは井戸掘り用のスコップであるが、人間が飲む水を得るためではなく、家畜に飲ませるための井戸掘り用である。足で踏みこむのではなく、もっぱら手を使って土を掘り出す。サヘル地帯の砂の多い土壌であればこそ有効な道具といえよう。現在では深井戸がかなり掘られているので、*lan* を実際に使う機会は多くはないと思われるが、現在のフルベの若者達でも *lan* を使っての井戸の掘り方をよく知っている。

セネガル国の中南部には東西に流れるガンビア河がある。この河の流域、兩岸のおよそ20キロメートルづつは旧英国領のガンビア国である。つまり、ガンビア国は大西洋への出口を除くまわりすべてをセネガル国にとりかこまれている。今回の収集業務で私はこのガンビア国を通

過して、セネガル最南部、ギニア・ビサウ国と境を接するカザマンス地方を訪れた。1974年以来セネガルには3度滞在しているが、いつも北東の乾燥地域を訪れていたので、このカザマンス地方は私にとっては初めて訪れる土地であった。

カザマンス地方は西の大西洋側から内陸部にかけて、Basse Casamance (カザマンス低部、ジガンシヨールを中心とする)、Moyenne Casamance (カザマンス中部、セディウを中心とした部分)、Haute Casamance (カザマンス高部、コルダからヴェリンガラにかけての部分) の三つに分けられている。私は西のジガンシヨールからコルダに向けて収集活動をおこなった。

セネガル北東のジョロフ地方ではウォロフ族、フルベ族だけといってよい住民構成であったが、カザマンス地方の住民構成は多様である。西からディオラ族(フォニイとフルップにわかれる)、マンジャク族、マンカーニュ族、バランテ族、ソセ族、マンダング族、フルベ族、そしてカザマンス河で漁業をおこなうトゥクルール族(セネガル最北部のセネガル河流域から移住してきた人々) などである。さらに、主として商業活動をしているウォロフ族、サラコッレ族の人々も多い。伝統的に男女とも稲作を中心とし、共同体にもとづく *acephalous* な社会構造をもつディオラ族に対し、マリ国から強力に発達した階級組織をもってはいりこんできたマンダング族、セネガル北部のフェルロ地域、あるいはマリ国のマシナ地方から牛をともなってやってきたが、現在はマンダング族と同じような農耕を主とするフルベ族、カザマンス河での漁業に活路を求めたトゥクルール族など、文

化的にもまことに多様な地域である。

北東部、ジョロフ地方のそれと比較する意味で、以下、カザマンス地方での収集品のうち農具についてだけ記すが、初めて訪れた土地であること、また収集活動の時間がきわめて限られたものであることなどから、くわしい調査をすることはできなかった。当地方で収集した農具について以下、簡略に述べる内容は文献にもとづくものが主であり、参考にした文献は Paul Péliissier の著、『Les Paysans de Sénégal』(1966)であることをおことわりしておく。

まず西側のディオラ族からみてゆくと、この部族の最大の特色は豊かな湿地帯を利用した稲作である。この地域はセネガルでも最も降雨量が多く、年間で1300ミリから1500ミリに達し、雨季は6月半ばから10月末に及ぶ。男女ともに稲作に従事する点、また先に述べたように家族を中心とした共同体が横につながった社会組織をもっており、したがってセネガルの他の部分にみられるカースト的な社会階級組織を一切もたない。(宗教上の指導者がいることはもちろんである。)この平等性を基盤とした社会構成は、東側のマンダング族が厳しい階級制にもとづいており、稲作も男は一切おこなわずもっぱら女の手にゆだねられていることとくらべると、きわだった特質である。

この稲作農耕をささえているのが *kajando* とよばれる柄のたいへん長いスキ具である。(Péliissier の本には *kayendo* と記されている。)

雨季にはいる前、はやければ3月頃から、やがて水におおわれる湿地帯の整備をしなければならぬ。水をかこいこむための堰をつくったり、土を深く掘り返

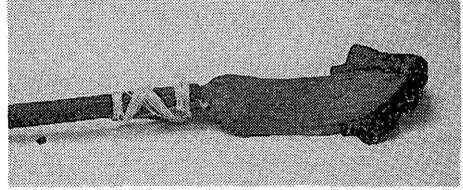


写真5 カジャンドのスキ部

して空気を通し、雑草の根を切り、表にさらすことで雑草を枯らし、養分として土にとりこみ、さらに畝をつくるための道具がカジャンドである。このカジャンドは Péliissier によると熱帯アフリカの他のどこにもみられない特徴的なものであるという [PÉLISSIER 1966: 738]。カジャンドは二つの部分を組みあわせてできている。一つは長い柄であり、この柄だけで2メートルほどある。直径は4～5センチあり、一方の端はスキ部をしぼりつけるために平たくけずってあり、他方の端は飾りとして丸玉状になっている。スキ部は長いへら状であり、先端の縁は薄く鋭く削られている。へら部は普通直線状ではなく、いくらか凹状になっている。へら部の長さは45センチから75センチ、幅は12センチから20センチとヴァリエーションがあるが、それは土質にあわせて各人が工夫するのだという。へらのくぼみも各人の工夫によっている。つまり、砂土が多く含まれ軽い土質のところでは幅広でくぼみの少ないへらでよいが、粘性の強い重い土質のところでは幅の狭い、くぼみの大きいへらが使われる。かつてはへらの先端部を火にあてて硬くしていたというが、現在では鍛冶屋が作る蹄鉄形の鉄刃をはかせている。へらの他方の端は柄にとりつけるための頑丈な突起となっている。とりつけはもちろん釘によるのではなく、紐でしぼりつける。紐と

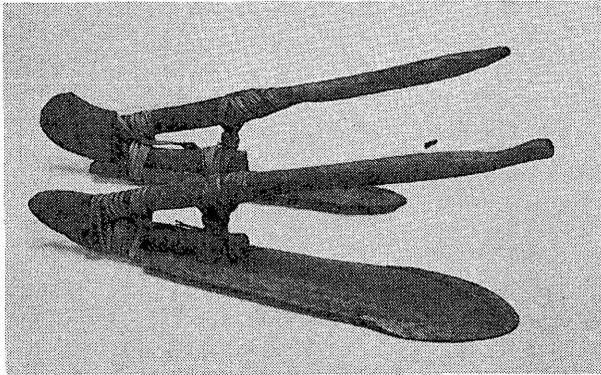


写真6 ドンコトン

しては自然の蔓を使ったり *Borassus flabellifer* の繊維を用いる。Pélissier がおもしろい話を註で述べているのでそれを付記しておこう。このカジャンドは機能的にもまことに秀れたものであり、形も最適であり現代の産業製品はこれに代るどのようなものも作り得ないという。今から30年ほど前、ある会社がカジャンドの形を全くコピーした金属ベラを売り出したが、値段の安さにもかかわらず普及しなかったという。柄に対してヘラ部の重さの平衡がとれていなかったこと、および摩耗度が激しかったことなどが理由であるという [PÉLISSIER 1966: 741]。ちなみにカジャンドの材料となる木は「鉄の木」とよばれる *Khaya senegalensis* である。

Basse Casamance を離れ、Moyenne および Haute Casamance に来るとマンダング族が多くなる。マンダングの男はトウジンビエ、モロコシ、トウモロコシ、および換金作物としての南京豆をつくる。男の農作業で特徴的な道具はマンダング語で *donkoton*、フルベは *daramba* とよぶ手鋤である。楕円形を極端にしたような形のヘラ部に対して鋭角状にとり

つけられた柄が特徴である。人は腰をふたつに折るようにしてドンコトンで表土をすくいとり、脇にかえしてゆくことで畝を作ると同時に、土に風を通す。土はやわらかくされ、畝をつくることによって水の吸収、水ハケがよくなる。また播種も直線状にすることができる。ドンコトンは播種前の整地に使われるばかりでなく、除草にも使え、雨で流れる土を畝にもどすことで畝の補強もなされる。ドンコトンによる作業は骨の折れるものであることは確かだが、しかしまたドンコトンのお陰で同じ土地を休閑させず何度も使えるということから、新しく土地を開墾するよりは労力の節約になるという利点がある。

稲作に従事するマンダング族の女性が使う鋤を最後に述べておこう。これはバッコ *barro* とよばれ、立って使うものである。ふたまたになった木の枝の一方を短かく切り、そこに鉄の刃をはめこんだものであるが、ディオラ族の男が使うカジャンドに比べると刃（ヘラ）の部分はずっと小さい。女性の肉体的力にみあったものであろう。雑草をとると同時に表土を浅く掘りかえすことができる。

カザマンス地方では各部族の特色を示す農具を収集できたと同時に、ディオラ族が作る多種の編みカゴ類、食器、椅子などの日用品、カザマンス河で漁業に従事するトゥクルール族が使う舟の櫂、西アフリカに広く分布しているトンボ玉の首飾りなど多くのものを収集しえたがそれらについては今はふれないでおく。

## (2) 楽器

今回収集した熱帯アフリカの楽器は12種、26点であり、それほど多くはない。収集した順序に従い列挙すると次の通りである。

- ザイール国の豎琴（ハーブ）
- フルベ族，4絃のリュート
- ディオラ族，ガラガラ（5点）
- ギニア・ビサウからセネガル・カザマンス地方の村に移住してきたフルベの男がもっていた横笛
- トゥクルール族，7絃のリュート
- フルベ，1絃の小バイオリン（弓奏楽器）（3点）
- ソセ族，1絃のリュート
- マンダング族，コーラとよぶハーブ・リュート（大型2点，小型1点）
- ザイール国のスリット・ドラム
- トーゴ，エウエ族のガラ・ガラ（3点）
- トーゴ，エウエ族のゴング（4点）
- エウエ族の金属製カスターネット（2点）
- 上記のうち，ザイール国のハーブ，スリット・ドラム，およびトーゴ国，エウエ族のガラ・ガラ，カスターネット，ゴング以外のものはすべて使用している人々から直接ゆずりうけたものである。
- ここではフルベ族のリュート，1絃の小バイオリン，およびマンダング族のハーブ・リュート，コーラについて簡単に

記しておこう。

セネガルのフルベ族のうち *wambaaBe* とよばれる 楽師のみに所有，および使用が限定されている 4 絃の リュート，*hoddu*/(pl.) *kolli* については，その起源に関する口伝，各部の名称などは『民博通信』No. 5，各個研究メモ欄への寄稿に記しておいた。このリュートは撥を使ってひくのではなく指奏するものである。この種の楽器は弓琴から発達したとみられているが [黒沢 1972: 322]，セネガルのフルベ族には弓琴はみられない。アフリカでリュートが多くみられるのは西アフリカのサヴァンナ地帯であり，またこの地域ではマンダング族のコーラのようなハーブ・リュート，および単声歌唱法が特色的にみられると Nketia は述べている [NKETIA 1974: 7]。

美しいメロディーを奏でる楽器として知られるコーラはセネガル南東部，ギニア，マリなどで使われており，やはり楽師のみに所有，使用が限定されている。楽師はコーラをひきながら首長の家系を朗唱したり，英雄に関する伝説をうたったりして生活を成り立たせているのであり，楽師にとってコーラは生活の糧と直結している。私はコルダに在住している楽師からコーラをゆずりうけたのであるが，その時楽師は，「コーラを買いとるといふのであれば，私の家全部を買いとってくれ」と言った。つまり，コーラを買いとるのは，楽師の家族も含めた家一軒全部を買いとると同じだという意味である。その楽師，および息子2人がコーラをもっていたために，譲ってもらうことができたのは幸運であった。

コーラをハーブ・リュートと述べ，リュートと区別するのは次の理由による。

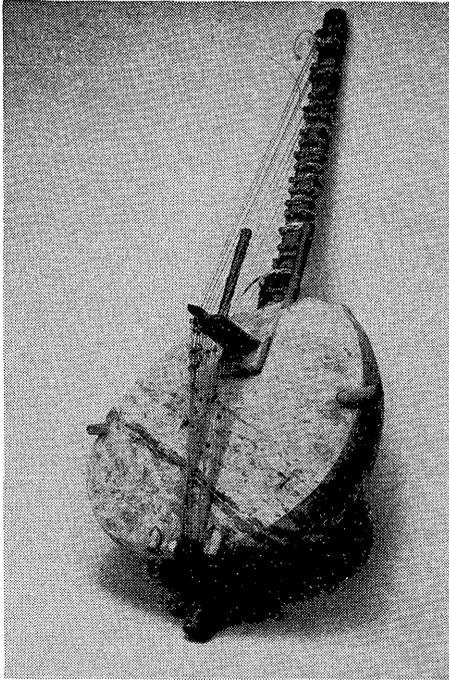


写真7 コーラ

つまり、絃が棹と平行になっている点ではどちらも同じだが、リュートの場合、複数の絃はいわば水平に横に並んでいるのに対し、ハープ・リュートの場合、複数の絃は共鳴部の膜面上に垂直におかれたプレートに支えられて垂直に並んでいる。プレートの両端には絃を通すきざみがつけられている。マンダング族のハープ・リュートはアフリカでも最も絃の数の多いものであるらしく (cf. NKETIA 1974: 104), 21絃ある。左側に11絃, 右側に10絃である。かつては羊腸を絃にしていたが、現在ではナイロン絃である。

さて、1絃の小バイオリンであるが、これがリュート、ハープ・リュートと異なる点は指ではなく弓でひくことである。セネガルのフルベ族の場合、先に述べた *hoddu* と異なり、男性ならば誰が所有し

ても、使用してもよい。とはいえ、壮年あるいは老年の男がこれをひくことはなく、結婚前の若い男性がみずから製作し、使う。(この楽器を購入した際の顛末については『月刊みんぱく』第3巻, 第5号に記しておいた。)

適度の大きさのひょうたんを二つに割り、棹をとりつけ、グンドとよばれる大トカゲの皮をはり、それに馬の尻毛を数本束ねた絃をはった、むしろ簡素な作りのものである。やはり馬の尻毛を利用した弓でひく。この種の弓奏楽器の発祥は中央アジア、インド、アラビア地区とみられており (cf. 黒沢 1972: 350), アフリカに導入されたのも、リュートなどにくらべれば比較的新しい時代のことではないかと思われる。西アフリカのサヴァンナ地帯で多くみられ、また、その使用が特定の人々に限られていない点が特色である。イスラム教の西アフリカへの導入と相前後しているのではなかろうか。(この点に関し、東京外国語大学, AA研, 川田順造氏から御示唆をいただいた。) 西アフリカの弓奏楽器とイスラム教の導入を直結して考えることはできないにせよ、アラブ文化と密接な関連があることは確かだろう。たとえば、黒沢隆朝の著, p. 351 に示された北アフカ、ムーア人のグスレとよばれる楽器と、西アフリカ各地の弓奏楽器は大変よく似ているし、チャド国、ティベスティ地方のテダ族で民族音楽の調査をした Brandily は、テダ族の弓奏楽器 *kiki* がトゥアレグ族の *imzad* に酷似していることを記している [BRANDILY 1974: 83]。

『民博通信』にも記したが、フルベ族においては、彼らが至上の財産とする牛は *hoddu* (リュート)の音ののってあらわ

れたとされ、従って *hoddu* をたいへん貴重なものとみなすのに対し、弓奏楽器である *nyaanyoolu* にはそれほどの価値が与えられていない。これは、ティベスティのテダ族において全く同一の素材に絃をはりかえることによってリュート、あるいは弓奏楽器として使われているものが、弓奏楽器として使われる時には低い価値しか与えられていないことと共通している (cf. BRANDILY 1974: 182-183)。

今回の収集調査では先に述べたマンダング族のコーラ、弓奏楽器、さらに1絃のリュート (ソセ族) などについては十分な調査がなされておらず、いずれ西アフリカの弦楽器について詳しい調査をしたいと願っている。

#### 4. おわりに——謝辞にかえて——

今回の西アフリカ調査ではまことに多くの方々のお世話になった。各地の村でこころよく資料を譲って下さった方々に、いちいちお名前をあげることはできないがまず心よりお礼申しあげる。

セネガル国、ダカール在の日本大使館館員の皆様にも多くの御親切をいただいた。外務省をとおして正式な便宜供与依頼をしていなかったにもかかわらず、まず内田園生大使には、ご自身の時間をお割きいただくなど、いろいろとお世話になった。

Keita 名取氏、Samba Tall 氏とは1974年以来、私がセネガルに行くたびに御親交をいただいているが、今回も収集業務に関する諸便宜をおはかりいただいた。Keita 名取氏はジャーナリストであるマリ国人の御主人と娘さん2人とともに、すでに数年来ダカールに居住しておられる方である。ダカールを訪れる日

本人のほとんどすべての人が何らかの世話になっており、私もその例外でないどころか、しばしばそのご好意に甘えさしていただいている。日本を遠くはなれた土地で、目だたぬながら故国の同胞に親切を惜しまれぬその態度に、心からの敬意とともに深い感謝の気持を捧げたい。Samba Tall 氏にも今回もまた御家族ぐるみのご親切をいただいた。特に今回はタバスキの祭りにおいて犠牲として羊を屠る模様の写真撮影に力を貸していただいた。

峯岸よしお氏、石田文化担当官にもさまざまの御配慮をいただいた。峯岸氏には、1976年以来、ご家族ぐるみの御親交をいただいていたが、現在は、シカゴの日本領事館に転任されてすでにおられない。石田文化担当官は日本の映画をセネガルの村落部で上映するなど意欲的な活動を現在も続けておられる。

同大使館にすでに3年勤務しておられる小瀬武氏にはことのほかお世話になった。1976年以来の親しい友人である同氏は私の宿の心配をして下さったのみならず、資料整理のこまかな仕事まで手伝って下さった。心からお礼申しあげる。また Ben-Said 夫人は運送会社との連絡をおとり下さった上、現地でタイプ・ライターをもちあわせない私のために、手すきの時間を利用してパッキング・リストのタイプをして下さった。

黒アフリカ基礎研究所 (IFAN) 博物館の館長 Bodiél Thiam 氏をはじめ、同博物館の職員、Abibou Diatta 氏、Aboudou Bodian 氏、Mbay 氏などの方々には言葉につくせないほどのお世話になった。Thiam 氏は IFAN 所属の研究者用の宿舍の一室を私に提供して下さ

った上、資料の発送、荷造りに至るまでを率先指導して下さいました。

トーゴでは昨年、本館に短いながらも滞在されたことのある N'sougan Agblemagnon 氏の甥にあたられる Galley Komi 氏のお世話をうけた。また、トーゴ国立科学研究所 (Institut National de la Recherche Scientifique) 所長, Sossah Kounoutcho 氏をはじめとする所員の方々にもお世話になっている。

さて、最後になったが、今回の公務出張期間終了後、財団法人人間博物館リトルワールドの御好意により、私は同博物館の豊田信幸氏、および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の川田順造助教授のお供をして、1978年12月23日より1979年1月24日まで、オート・ボルタ、およびマリを訪れる機会をもつことができた。このことに関しては公務出張期間終了後、個人研修として出張の延長をお認め下さった本館の梅棹忠夫館長をはじめ、労をおとりいただいた各研究部長、および当館管理部、ならびに文部省の関係者の方々に心からお礼を申しあげたい。また当時、人間博物館リトルワールドの主任研究員をしておられ、現在、東京大学教養学部助教授の大貫良夫氏、および財団法人リトルワールドのリトルワールド建設室次長、大木環氏には経験不足の私をわざわざ今回の収集調査行におさそいいただいたご好意に深く感謝とお礼を申しあげる。

全行程を共にすることはできなかったが、オート・ボルタ、マリでの収集調査旅行は私にとってまことに得るところが大であった。川田順造助教授からは調査に対する基本的な姿勢を教えられたし、また細かな点にいたるまで数多くの懇切

な御教示をいただいた。豊田信幸氏には物心両面にわたって支えとなっていたことができた。いずれにしても、オート・ボルタ、およびマリの今回の調査行は私にとって新しい展望を開くものであった。お世話になったすべての方々にあらためて深く感謝の意を表したい。

## 文 献

BRANDILY, M.

1974 *Instruments de Musique et Musiciens Instrumentistes chez les Teda du Tibesti*, Musée Royal de l'Afrique Centrale, Tervuren, Belgique.

KAWADA, J.

1975 *Technologie Voltaïque*, Rapport de Mission 1973-1975, Musée National, Ouagadougou, Haute-Volta.

黒沢隆朝

1972 『図解世界楽器大事典』 雄山閣, 東京.

NKETIA, J. H. K.

1974 *The Music of Africa*, W. W. Norton & Company, New York.

PÉLISSIER, P.

1966 *Les Paysans du Sénégal, Les Civilisations Agraires du Cayor à la Casamance*, Saint-Yrieix, France.